ベトナム女性詞人段氏点と詞牌風雨恨

平　塚　順　良

（受付　2019 年 10 月 1 日）

一，は　じ　め　に

段氏点（Đoàn Thị Điểm，1705～1748）[1] は，ベトナムの中興黎朝（1533～1789）を生きた女性で，小字を紅霞といった。その生涯は『段氏実録　紅霞夫人家譜』[2] に詳しいので，ここでは段氏点の生涯を簡単に紹介するだけにしたい。段氏点は若くして文才に秀でた。25歳の時に父を亡くし，間もなく兄をも亡くしてしまう。そこで段氏点は，医術や代筆によって，男性のいなくなった一家を切り盛りする。その後，後宮で寵姫の教授に当たり，さらに章陽の地で学問を講じ，ある時の聴講者は50数名にもおよんだ。それから阮翹の継室となり，44歳でこの世を去る。

今回は，このベトナムの才媛，段氏点の填詞について論じたいと思う。現存する段氏点の詞は 6 闋のみと決して多くない。しかし，そもそもベトナム詞が300闋程度しか残されていないことを考えると[3]，たとえ 6 闋だけであってもその存在は貴重である。

さらに，この 6 闋の詞というのは，段氏点の漢文小説集『伝奇新譜』[4] の「雲葛神女伝」から 5 闋，「碧溝奇遇記」から 1 闋を拾い出してきたものである。つまりこれら 6 闋の詞は，小説を構成する一部分であり，小説中では登場人物が作ったことになっている。段氏点にとって詞とは，小説の構成要素のひとつであって，独立した文学とは考えていなかったのかもしれない。

女性詞人としては中国宋代の李清照が最も評価が高く[5]，その他にも同じく宋代の朱淑真や，清代には満族の顧太清がいる。こうした中国の女性詞史については，鄧紅梅がすでに『女

1）段氏点の生卒年は，『Từ Điển Nhân Vật Lịch Sử Việt Nam』Nhà xuất bản Giáo dục・2005年の128頁にもとづく。

2）『段氏実録・紅霞夫人家譜』は，『越南漢文小説叢刊』第 2 冊伝奇類，台湾学生書局・1987年に収録されている。

3）ベトナム詞については，Phạm Văn Ánh「Thể loại *TỪ* trong văn học trung đại Việt Nam」（2014年ベトナム社会科学院博士論文）が，すでに総合的な研究をおこなっている。またベトナム詞の研究史については，武氏青簪「越南填詞与詞学研究概述」（『雲漢学刊』第33期，国立成功大学中国文学研究所・2016年 8 月）に詳しい。

4）段氏点『伝奇新譜』は，前出の『越南漢文小説叢刊』第 2 冊伝奇類に収録されており，楽善堂刊本を底本に用いる。また『越南漢文小説集成』第 4 冊，上海古籍出版社・2010年にも収録されている。

5）たとえば袁行霈主編『中国文学史（第 2 版）』第 3 巻，高等教育出版社・2005年の103頁「李清照」

性詞史』山東教育出版社・2000年にまとめている。たとえばこれを中国ばかりではなく，ベトナム・日本・朝鮮をも包括した漢文化圏の女性詞史へと拡大することは果たして可能だろうか。日本には有智子内親王「漁歌子」や菊舎尼「長相思」が残されている[6)]。そしてベトナムには，これからその詞について論じようとしている段氏点がいる。

しかし，今回はひとまずそのような総論ではなく，そうした研究を準備するものとして，段氏点の填詞に焦点を当てた基礎的な研究を進めることにしたい。具体的には，ベトナムで詞牌風雨恨が新たに生み出された経緯について論じたい。また段氏点は通俗類書『国色天香』を手本にして，填詞をおこなったことについて明らかにする。

二，段氏点と詞牌風雨恨

ここではまず，段氏点の詞 6 闋を順番に確認していくことにしたい。それぞれの詞牌と詞題は次の通りである[7)]。

「雲葛神女伝」

詞牌	詞題
春光調	春詞
隔浦蓮	夏詞
歩歩蟾	秋詞
一剪梅	冬詞
風雨恨	なし

「碧溝奇遇記」

詞牌	詞題
憶秦娥	なし

まずはじめの 4 闋について指摘できるのは，春詞には春光調というように，それぞれ四季に即した詞牌が選ばれており，本意の作とみなせる点である。つまり夏には蓮，秋には月[8)]，

6） 神田喜一郎『日本における中国文学Ⅰ』二玄社・1965年の第 2 章「填詞の濫觴」・第17章「菊舎尼と武元登登庵」

7） 段氏点の 6 詞については，前出の Phạm Văn Ánh「Thể loại *TỪ* trong văn học trung đại Việt Nam」がすでに指摘している。

8） 中国では，月に住む蟾蜍（ヒキガエル）が神話中に現れることから，蟾蜍あるいは蟾を，月の代称として用いる。例えば，『淮南子』精神訓に「日中有踆烏，而月中有蟾蜍（太陽の中にはヤタガ

冬には梅である。風雨恨も，連日春雨に降りこめられた恨みをうたい，憶秦娥も恋慕の情をうたうことから，段氏点は内容に即した詞牌を意図的に選択していると言える。

段氏点の詞 6 闋の中で，最も注意を引くのは風雨恨である。風雨恨は非常に珍しい詞牌で，『詞律』『欽定詞譜』に見えない。また，各朝代の詞作を網羅しようと試みた，『全唐五代詞』『全宋詞』『全金元詞』『全明詞』『全明詞補編』『全清詞・順康巻』『全清詞・順康巻補編』『全清詞・乾雍巻』[9] にも見えない。おそらく現存する作例は，段氏点の 1 例のみである。つまりベトナムで誕生した新しい詞牌ということになる。

ひとまず段氏点の風雨恨を以下に引用してみることにしたい[10]。なお同時に，詞牌の格式を把握しやすいよう，一句の字数をアラビア数字で示し，句は「,」によって，平韻は「。」仄韻は「•」によって表す。ただし読点は簡略化のため無視する。

段氏点「風雨恨」

3，3•7•5。5。3•3•7•7。7。7，7。

才何佳，情何好❶。一片才情撩客惱❶。客惱幾時消①。相尋不怕遙①。風忽起❷。雨忽至❷。深嗟咫尺成千里❷。雨伯風姨太薄情③。春愁寥寂戶常扃③。幾回夢遶桃源裏，欲把千金買一晴③[11]。

押韻：『詞林正韻』❶＝第 8 部仄声
①＝第 8 部平声
❷＝第 3 部仄声
③＝第11部平声

風雨恨の特徴を挙げるとすれば，頻繁におこなわれる換韻だろう。先述の通り詞牌風雨恨の作例は，管見の限り段氏点の 1 例しか現存しない。では，段氏点は何の根拠もなしに詞牌風雨恨を創り出したのだろうか，それとも何か基づくものがあったのだろうか。

ベトナムには，明末の通俗類書『国色天香』が漢文の模範文例集として珍重されていた形跡がある。例えば，『国色天香』上層に収録される各種文体を，文体別に整理した抄本『丹花

ラスがいる，月の中にはヒキガエルがいる)」とある。

9）『全唐五代詞』中華書局・1999年，『全宋詞』中華書局・1965年，『全金元詞』中華書局・1979年，『全明詞』中華書局・2004年，『全明詞補編』浙江大学出版社・2007年，『全清詞・順康巻』中華書局・1994年～2002年，『全清詞・順康巻補編』南京大学出版社・2008年，『全清詞・雍乾巻』中華書局・2012年。また『全明詞』『全清詞』については，その補遺を試みた論文が多く存在する。『全明詞』補遺については34論文，『全清詞』補遺については66論文を確認したが，その中にも詞牌風雨恨は含まれていなかった。

10）段氏点の詞は，前出の『越南漢文小説叢刊』第 2 冊伝奇類を底本とする。また『越南漢文小説集成』第 4 冊と異同がある場合は，注で指摘する。

11）『越南漢文小説集成』は，雨忽至を兩忽至に誤る。

上品』[12] や，『国色天香』から詞のみを抽出した阮朝抄本『古調吟詞』[13] がベトナムの漢喃研究院に所蔵されている[14]。

段氏点が基づいたのは，『国色天香』[15] 巻 7 下層に収録された小説「天縁奇遇」下に「作風雨恨一篇，以記其怒（風雨恨 1 篇を作り，その怒りを記録した）」とあり，それに続いて，

風何狂①。雨何驟❷。妬花不管花枝瘦❷。花瘦亦何妨①。深嗟風雨忙①。風不歇❸。雨不竭❸。同枝花④。
自搖折❸。幸得東皇巧護遮④。風風雨雨曲欄斜④。花枝不放春光漏，依舊清香到碧紗④。

押韻：『広韻』①＝下平声陽韻・唐韻
❷＝去声宥韻
❸＝入声月韻・薛韻
④＝下平声麻韻

とある箇所だと考えられる。ただし，これは韻文ではあるが，詞とは言えない。天縁奇遇にも「作風雨恨一篇（風雨恨 1 篇を作り）」とあるだけで，これを詞とする記述はない。つまり韻文の題名「風雨恨」を，段氏点が詞牌名と誤解したことから，詞牌風雨恨は誕生したと考えられるのである。

それでは，段氏点のように，これを詞とみなした場合，一体どのような格式とみなせるのかを確認したい。

3，3•7•5。5。3•3•3，3•7。7。7，7。
風何狂，雨何驟❶。妬花不管花枝瘦❶。花瘦亦何妨②。深嗟風雨忙②。風不歇❸。雨不竭❸。同枝花，
自搖折❸。幸得東皇巧護遮④。風風雨雨曲欄斜④。花枝不放春光漏，依舊清香到碧紗④。

押韻：『詞林正韻』❶＝第12部仄声
②＝第 2 部平声
❸＝第18部入声

12） 漢喃研究院所蔵『丹花上品』の配架番号は A1498である。また『越南漢喃文献目録提要』中央研究院中国文哲研究所・2002年の3538番に著録されている。『丹花上品』については，平塚順良「ベトナム西山朝の潘輝益と詞牌楽春風」，『風絮』14号，日本詞曲学会・2017年において言及したことがある。

13） 漢喃研究院所蔵『古調吟詞』の配架番号は A2262である。また『越南漢喃文献目録提要』の3361番に著録されている。『古調吟詞』が，『国色天香』から詞のみを抽出したものであることは，Phạm Văn Ánh「Cổ điệu ngâm từ không phải là một từ tập của Việt Nam」，『Tạp chí Hán Nôm』2007年第 3 期に詳しい。

14） 陳益源「越南漢文小説《花園奇遇集》与明代中篇伝奇小説」，『越南漢籍文献述論』中華書局・2011年も，ベトナムにおける『国色天香』の影響を論じている。

15） 『国色天香』のテキストには，『古本小説集成』上海古籍出版社・1990～1994年を使用した。

④＝第10部平声

天縁奇遇は第８・９句を「３，３•」とするが，段氏点の作例ではここを７字句とする。両者の大きな差異はこの部分のみである。このように，段氏点が天縁奇遇中の風雨恨を詞牌と誤解し，これを手本として填詞をおこなったことから，詞牌風雨恨は誕生することになったのだと考えられる。誤解によるとは言え，ベトナムで新たな詞牌が生成されたのは，とても興味深い現象だと言えよう。ちなみに先にも触れた『古調吟詞』は，『国色天香』の中から詞のみを抽出したベトナム抄本であるが，この『古調吟詞』の中にも風雨恨が詞として収録されているのは注目に値する。

さて，風雨恨をその中に包含する小説「天縁奇遇」は，『国色天香』以外にも，７種のテキストに収録されている[16)]。つまり，『繡谷春容』巻９上層・『萬錦情林』巻５・何大掄編『燕居筆記』巻１上層・林近陽編『燕居筆記』巻４上層・『花陣綺言』巻４・馮夢龍編『燕居筆記』下巻５・『風流十伝』巻４である[17)]。そうすると段氏点が，天縁奇遇中の風雨恨を手本にしたとまでは言えても，８種のうちどのテキストに収録された天縁奇遇を見たのかまでは厳密には限定しきれないところがある。先述した『丹花上品』『古調吟詞』の存在から，『国色天香』がベトナムに伝来したことは確実であり，８種の書物のうちで，段氏点によって手本として用いられた可能性が最も高いのは『国色天香』である。

段氏点が見たのはこの８種のテキストのどれであったのか，限定を加えることは可能であろうか。文字の異同を手掛かりにして，この問題の解決を試みたい。

風雨恨について，この８種のテキスト間では文字の異同がいくつか見られるのだが[18)]，今回は末句にのみ注目することにしたい。以下に，各テキストにおける末句の異同を一覧にして示そう。

書　　名	末　　句
『国色天香』	依舊清香到碧紗

16）天縁奇遇の収録状況は，大塚秀高「明代後期における文言小説の刊行について」，『東洋文化』61号，東京大学東洋文化研究所・1981年による。

17）『繡谷春容』・『萬錦情林』・何大掄編『燕居筆記』・『花陣綺陣』・馮夢龍編『燕居筆記』のテキストには，『古本小説集成』を使用した。林近陽編『燕居筆記』のテキストには，早稲田大学蔵本（請求記号：ヘ21 02760）を使用した。『風流十伝』のテキストには，『域外漢籍珍本文庫』第２輯子部第19冊，西南師範大学出版社/人民文学出版社・2011年を使用した。

18）先ほど問題にした天縁奇遇「風雨恨」の第８・９句について，『国色天香』との文字の異同を以下に示す。『繡谷春容』・何大掄編『燕居筆記』は文字の異同なし。『萬錦情林』・林近陽編『燕居筆記』・『花陣綺言』・馮夢龍編『燕居筆記』・『風流十伝』は，「同枝花，自搖折。」を「一枝花，自搖折。」に作る。どのテキストでも格式を「３，３•」とする点は変わりない。

『繡谷春容』	依舊清香到碧紗
『萬錦情林』	依舊清香到碧**軒**
何大掄編『燕居筆記』	依舊清香到碧**軒**
林近陽編『燕居筆記』	依舊清香到碧**軒**
『花陣綺言』	依舊清香到碧**軒**
馮夢龍編『燕居筆記』	依舊清香到碧**軒**
『風流十伝』	依舊清香到碧**軒**

『国色天香』『繡谷春容』以外は，末句末字を軒に作ることが分かる。軒は，『詞林正韻』では第7部平声に属するので，韻を踏み外していることになる。詞を含むあらゆる韻文は，末句の末字で必ず押韻する。もしも段氏点の見たテキストが，末句末字を軒に作っていたとすれば，風雨恨は詞牌ではないと気付くはずである。万が一気付かなかったとしても，末句末字を軒に作るテキストを手本として填詞をおこなえば，末句で押韻しない格式の風雨恨が生まれるはずだ。

そうすると段氏点の見たテキストは，末句末字を紗に作り押韻する『国色天香』・『繡谷春容』の2種にまで限定することが可能である。

三，段氏点の隔浦蓮

前章では，詞牌風雨恨がベトナムで誕生した経緯について論じ，段氏点が手本としたテキストを『国色天香』・『繡谷春容』の2種類にまで絞り込んだ。ここでは，段氏点が手本としたテキストは『国色天香』であったことを論じたい。

前章で論じた風雨恨を除いて，残された段氏点の詞5闋にまだ検討を加えていない。この中から，まずは隔浦蓮[19]を採り上げて論じることにしたい。段氏点の隔浦蓮は，詞譜の格式に合致せず，却って『国色天香』の作例と相関を示す。以下に段氏点・『国色天香』・『詞律』の作例を引いて，比較してみよう。

段氏点「隔浦蓮」夏詞

6• 5• 5• 5• 5• 3• 5，3•

4，6，4，6• **5• 4**，**4•**

19） 隔浦蓮は，『詞律』巻11に「隔浦蓮近拍…或無近拍二字（隔浦蓮近拍…あるいは近拍の2字がない）」とあり，『欽定詞譜』巻17にも「隔浦蓮近拍…一名隔浦蓮（隔浦蓮近拍…またの名を隔浦蓮）」とある。

乾坤增着鬱燠●。草裏青蛙鬧●。枝頭寒蟬噪●。聲聲杜宇惱●。啞啞黃鸝咾●。頻相告●。春主今歸兮，如何好●。

這般景色，添起一番撩撩，幸祝融君，鼓一曲南薰操●。親送荷香到●。前番傷心，隨風盡掃●[20]。

押韻：●＝『詞林正韻』第 8 部仄声[21]

『国色天香』天縁奇遇下「隔浦蓮」

6● 5● 5，5● 5● 3● 5● 3●

4，6● 4，6● **5● 4**，**4●**

紅蘭相映翠葆●。郎在香閨窈●。雲重遮嬌月，巢深怨棲鳥●。睡蝶迷幽草●。頻相告●。鴛鴨同池沼●。郎年少●。

通宵不起，何故恁般顛倒●。有約偏違，幽興獨捱清曉●。今本望郎到●。任地慇懃，即須撇了●。

押韻：●＝『詞林正韻』第 8 部仄声

『詞律』「隔浦蓮」[22]

6● 5● 5，6● 5● 3● 5● 3●

4，6● 4，6● 7● 2● 6●

『詞律』が模範として示す格式では，末三句を「7● 2● 6●」とするのにも関わらず，段氏点と『国色天香』は，共通して末三句を「5● 4，4●」に作る。段氏点と『国色天香』の隔浦蓮では，三箇所で押韻の相違が見られるものの，末三句の符合は，段氏点が天縁奇遇の隔浦蓮を模倣したものと見なせるだろう。加えて，双方第 6 句を「頻相告」に作る点も模倣の証拠となる。

天縁奇遇中の隔浦蓮については，先述した 8 種のテキスト間で文字の異同が見られる[23]。

20）『越南漢文小説集成』は第 1 句の着字を，漢喃研究院蔵抄本に従って削る。また，頻相告を類相告に誤る。『越南漢文小説叢刊』・『越南漢文小説集成』ともに，「幸祝融君鼓一曲南薰操」で一句とする。『詞律』によれば「幸祝融君，鼓一曲南薰操」とすべきである。

21）撩字は『詞林正韻』第 8 部平声に属するが，段氏点は押韻したつもりであったのかもしれない。また咾字を『詞林正韻』は載せないが，『集韻』では上声晧韻に属し老字と同音であることから，押韻しているものとみなした。

22）煩雑なので『詞律』については，格式のみを示す。『詞律』は，隔浦蓮の格式として 1 例のみを挙げる。なお『欽定詞譜』は 5 例を挙げるが，段氏点・『国色天香』の格式と類似する作例は挙げられていない。

23）隔浦蓮について，各テキストにおける文字の異同を示す。①『繡谷春容』は隔浦蓮を省略する。②『萬錦情林』は，通宵を通資に作る。顛倒を傾倒に作る。即須撇了を郎須撇了に作る。③何大掄編『燕居筆記』は，顛倒を傾倒に作る。即須撇了を郎須撇了に作る。④林近陽編『燕居筆記』は，通宵を通資に作る。顛倒を傾倒に作る。⑤『花陣綺言』は，「郎在香閨窈。雲重遮嬌月。巢深怨棲鳥。睡蝶迷幽草。頻相告。」を「郎在香閨，巫雲重遶。嬌月巢深怨棲鳥。睡蝶迷，頻頻相告。」とする。↗

とりわけ注目すべきなのは，『繡谷春容』が隔浦蓮を省略して載せない点である[24)]。

末句末字を紗に作り押韻する風雨恨を収録し，かつ末三句を「5● 4， 4●」とする隔浦蓮をも載せるテキストは『国色天香』のみである。そうすると，段氏点が填詞の手本としたのは，『国色天香』に限定される。

四，段氏点の春光調と歩歩蟾

さて，これまでに段氏点の風雨恨と隔浦蓮を検討した結果，段氏点は『国色天香』を手本として填詞をおこなったとの結論を得た。続けて残された詞4闋についても，『国色天香』との関連性を指摘できるだろうか。本章では詞牌名に関して検討を要する2闋，春光調・歩歩蟾について論じることにしたい[25)]。この春光調と歩歩蟾とは，代表的な詞譜である『詞律』『欽定詞譜』にその名が見えない。そこで本章ではこの2詞牌の格式を明らかにし，同様の格式を有する詞牌がないかどうかを検証してみることにしたい。

それでは段氏点の春光調とその格式を以下に引用し，検証に移ることにしたい。

段氏点「春光調」春詞

3， 3。3。7。3。

6， 6。7。3。

春似畫，暖氣微。愛日遲。桃花含笑柳舒眉。蝶亂飛。

叢裏黄鶯睍睆，梁頭紫燕喃呢。浩蕩春閨不自持。掇新詞[26)]。

押韻：○＝『詞林正韻』第3部平声

これは『詞律』巻2・春光好が挙げる欧陽炯の作例と類似する。欧陽炯「春光好」の格式を以下に示し，対比してみたい。

3， 3。3。7。3。

6， 6。7， 3。

⑥馮夢龍編『燕居筆記』は，葆字を欠く。即須撇了の即字を欠く。⑦『風流十伝』は葆字を欠く。郎年少を即年少に作る。即須撇了の即字を欠く。

24） 『繡谷春容』は，その全体を見ても，隔浦蓮を一闋も載せない。

25） 前出，Phạm Văn Ánh「Thể loại *TỪ* trong văn học trung đại Việt Nam」は，附録2.2において，春光調とは春光好，歩歩蟾とは歩蟾宮のことであるとするが，考証を示さない。本論も同様の結論に達するが，どうしてそうだと言えるのか具体的な考証の過程を示す。

26） 第1句「春似畫」を『越南漢文小説集成』は「春光似畫」とするが，校勘記に何も記さない。

段氏点の春光調は第8句も押韻するが，それ以外の部分はすべて欧陽炯「春光好」の格式と一致する。春光調と春光好では，まず詞牌名において春光の2字が共通し，かつ格式の相違点も一か所のみ，第8句を押韻するか否かである。このことから段氏点の春光調は，つまり春光好であると見なせるだろう。段氏点の春光調と，『詞律』・『国色天香』[27] の春光好とは，格式が三者互いにほぼ一致する。そのため段氏点の春光調について，『国色天香』との関連性を指摘することは難しい。

では，歩歩蟾はどうだろうか。まずはやはり段氏点の歩歩蟾とその格式を示し，確認するところから始めたい。

段氏点「歩歩蟾」秋詞

7● 7● 7，7●

7● 7● 9，7●

水面浮藍山削玉●。金風剪剪敲寒竹●。蘆花萬里白依依，樹色霜凝紅染綠●。

瑩撤蟾宮娥獨宿●。瑤階獨步秋懷促●。不如徑來籬下菊花香，閒坐撫瓠彈一曲●。

押韻：●＝『詞林正韻』第15部入声

詞牌名や格式から推測するに，段氏点の歩歩蟾とは，つまり歩蟾宮のことではないかと疑われる[28]。『詞律』巻8は歩蟾宮を5体提示するが，以下には楊無咎の作例について格式のみを示す。

7● 7● 7，7●

7● 7● 8，7●

この格式の第7句に1字を増添すれば，段氏点の格式になる。このように，歩歩蟾と歩蟾宮とでは，詞牌名において歩蟾の2字が共通し，格式の相違点は第7句における1字の有無のみである。このことから，歩歩蟾とは歩蟾宮のことであると認めてよいと思われる[29]。

27）『国色天香』の春光好は，133頁に見える。

28）曲牌に歩歩嬌があり，歩歩蟾と名称が似る。また歩歩嬌には，北曲曲牌と南曲曲牌とが存在する。歩歩嬌と歩歩蟾は，曲牌と詞牌という違いがある上に，格式も大きく異なることから，双方は別のものであると考えられる。歩歩嬌の格式については，呉梅『南北詞簡譜』129頁・602頁（『呉梅全集』河北教育出版社・2002年）に詳しい。

29）歩蟾宮には，詞牌のほかに北曲曲牌も存在する。『太和正音譜』巻下は，「折桂令，即蟾宮曲・天香引・秋風第一枝・歩蟾宮（折桂令，つまり蟾宮曲・天香引・秋風第一枝・歩蟾宮のことである）」として，歩蟾宮を折桂令の異名として挙げる。北曲曲牌歩蟾宮の格式は，段氏点の歩歩蟾と大きく異なることから，双方は別のものであると考えられる。なお北曲曲牌歩蟾宮の格式については，↗

たった1字の相違であるから，段氏点が『詞律』の作例を手本とした上で，第7句に1字を増添した可能性は十分にある。しかし，『国色天香』には，第7句を9字とするだけでなく，かつ語句の面でも段氏点の歩歩蟾と相関が認められる作例を見いだせる。

『国色天香』巻2下層に収録される小説「劉生覓蓮記」上に，歩蟾宮の作例が見られる。以下に原文を示し，あわせて格式を示そう。

『国色天香』劉生覓蓮記上「歩蟾宮」[30)]

7● 7● 7， 7●

7● 7● 9， 7●

萬斛新愁眉鎖住。凭欄不賦啼鵑句。終朝埋恨幾時舒，良工難畫相思處。

多情對此愁千緒。心隨風逐沾飛絮。不如將心托筆寄丹青，落得不知春又去。

押韻：●＝『詞林正韻』第4部仄声

『国色天香』の歩蟾宮は，第7句を9字に作り，段氏点「歩歩蟾」の格式と完全に一致する。しかも第7句を不如からはじめる点でも，両詞には一致が見られる。『詞律』が採り上げないように，第7句を9字に作る歩蟾宮は，一般的な格式ではない。それにも関わらず両詞の格式が一致し，かつ語句の面でも相関が認められるということは，段氏点が『国色天香』の歩蟾宮を手本として填詞をおこなった可能性は高い。

ちなみに『越南漢文小説叢刊』26頁・『越南漢文小説集成』195頁はともに，段氏点「歩歩蟾」の7句目以降を，「不如徑來籬下菊。花香閒坐，撫瓠彈一曲」つまり「7● 4， 5●」と断句する。菊は『詞林正韻』第15部入声に属することから，韻字とみなしているのである。しかしこれでは，『詞律』が採るどの格式とも合致せず，『国色天香』の歩蟾宮とも合致しなくなる。『国色天香』の歩蟾宮に基づくならば，菊を韻字とみなさず第七・八句は「不如徑來籬下菊花香，閒坐撫瓠彈一曲」の「9， 7●」とみなすべきである。

このように，段氏点の歩歩蟾は，歩蟾宮のことだと考えられる。またその格式は，詞譜ではなく，『国色天香』を手本としたようだ。

↘『太和正音譜』のほか，『南北詞簡譜』139頁にも詳しい。

30） 劉生覓蓮記は，前出の大塚秀高「明代後期における文言小説の刊行について」によると，『国色天香』以外にも，『繡谷春容』巻2上層・『萬錦情林』巻3下層・『花陣綺言』巻11・馮夢龍編『燕居筆記』下巻9の4種のテキストに収録されている。なお歩蟾宮について，この5種のテキスト間で文字の異同は見られない。

五，段氏点の一剪梅・憶秦娥

前章では詞牌名に問題のある春光調・歩歩嶮を扱ったが，ここでは詞牌名に問題のない一剪梅・憶秦娥について言及することにしたい。

まず，一剪梅については，段氏点・『国色天香』[31]・『詞律』[32] のすべてで格式が一致するので，何も言えることはない。

次に，段氏点の憶秦娥については，『国色天香』の作例との類似性を指摘できる。それではこれまでと同じように，段氏点・『国色天香』・『詞律』の作例を以下に挙げて，比較してみよう。

段氏点「憶秦娥」

３。３。７。８。

６。７。４，４。

巧様粧。這嬌娘。現是觀音幻道場。若敎鐵石掛肚牽腸。

書房好伴清光。人間萬願總尋常。何時與會，明月西廂

押韻：○＝『詞林正韻』第２部平声

『国色天香』[33] 鍾情麗集上[34]「憶秦娥」

３。３。５。８。

６。７。４，４。

憶秦娥。憶秦娥。無意奈渠何。一場好事從此蹉跎。

茫茫日月如梭。悠悠光景逐流波。花天月地，畢竟閑過[35]。

押韻：○＝『詞林正韻』第９部平声

31）『国色天香』の一剪梅は，45頁・367頁・679頁・715頁に見える。

32）一剪梅は，『詞律』巻９・『欽定詞譜』巻13に見える。

33）『国色天香』中には，憶秦娥が複出する。ここに挙げたのは，段氏点の作例と格式が類似するものである。憶秦娥は他にも，103頁・262頁・604頁・703頁に見える。

34）鍾情麗集は，前出の大塚秀高「明代後期における文言小説の刊行について」によると，『国色天香』以外にも，『繡谷春容』・『萬錦情林』・何大掄編『燕居筆記』・林近陽編『燕居筆記』・『花陣綺言』・馮夢龍編『燕居筆記』・『風流十伝』の７種のテキストに収録されている。

35）憶秦娥について，各テキストにおける文字の異同を示す。『繡谷春容』は，異同なし。『萬錦情林』・何大掄編『燕居筆記』・林近陽編『燕居筆記』・『花陣綺言』・馮夢龍編『燕居筆記』・『風流十伝』は，「無意奈渠何。」を「無意奈渠何。奈渠何。」とする。

『詞律』巻４，憶秦娥[36)]

第１例　３● ７● ３● ４，４●
　　７● ７● ３● ４，４●

第２例　２● ５● ２○ ７○
　　７● ５● ２○ ７○

段氏点と『国色天香』の憶秦娥は，第３句を除けば，すべての格式が一致する。段氏点の格式を，『詞律』と比較すると，かなり大きな差異があることが分かる。段氏点は全８句に作るが，『詞律』第１例は全10句に作り，そもそも句数が異なる。『詞律』第２例は全８句であるが，段氏点とは全句において字数が異なる。このように『詞律』の示す格式の規範から逸脱したところで，段氏点と『国色天香』の作例は相関を見せる。

この憶秦娥の事例は，段氏点が『国色天香』を手本にして填詞をおこなったとする結論をさらに補強する。

六，お わ り に

これまで論じてきたところをまとめることにしたい。ベトナム女性段氏点の詞は，６闋が現存する。段氏点の詞の中で，最も注目すべきなのは風雨恨である。風雨恨という詞牌は，段氏点の作例以外には見られない。段氏点は小説「天縁奇遇」中に見える韻文風雨恨を詞牌名と勘違いし，これを手本として填詞をおこなった。これによって新たな詞牌風雨恨がベトナムで誕生することになった。しかし段氏点の後を継いで，この詞牌風雨恨を用いて填詞をおこなう者は現れなかったようである。

段氏点が填詞に当たって手本にした書物は『国色天香』である。ベトナムでは『国色天香』が漢文の模範文例集として珍重された形跡があり，『国色天香』を元にして作られた抄本『丹花上品』『古調吟詞』が現存する。

段氏点が風雨恨を作る際に手本にしたテキストは，文字の異同から，『国色天香』か『繡谷春容』に限定される。さらに段氏点が隔浦蓮を作る際に手本とした天縁奇遇中の隔浦蓮を，『繡谷春容』は省略して載せない。すると段氏点が手本にしたのは，『国色天香』に限定される。

36）『詞律』は憶秦娥について６体を載せる。煩瑣なので，ここでは李白と毛滂の作例のみを代表として示す。なお『詞律』所載のその他の４体も，段氏点・『国色天香』の格式との差異は大きい。また『欽定詞譜』巻５は，憶秦娥について10体を載せるが，段氏点の作と類似する格式は見られない。

段氏点の春光調・歩歩蟾は，その格式に注目すると，それぞれ春光好と歩蟾宮であると見なすことができる。そして段氏点と『国色天香』の憶秦娥は，詞譜の示す模範的な格式から逸脱したところで，強い相関を示す。このことは段氏点が『国色天香』を手本として填詞をおこなったとする結論をさらに補強する。

ベトナムにおける詞の受容に通俗類書が果たした役割はかなり大きいようだ。詞だけに限らず，ベトナム漢文学と通俗類書との関係については，これからさらに研究を進めていく必要がある。また，ベトナムにも填詞をおこなった段氏点という女性がいたことは，女性詞史のなかに記されてしかるべき事柄であろう。